

## 日文研随想——やぶにらみ私論

琴浦 香代子

### 1. 「日本研究」とは？

2009年4月-2015年3月末の6年間にわたり、日文研に「海外研究交流プロジェクト員」として勤務して、海外研究交流という立場から多くの国内外の研究者と事務方の仕事ぶりを見聞する機会に恵まれた。

縁あって日文研に勤めることになったわけだが、当初（募集時）の所属先であった海外研究交流室は、着任の2009年4月1日は混乱の極、交流室は物理的に消滅し、着任先は研究協力課にいつの間にか変更、事務室の私にあてがわれる椅子も電話も何もない光景は、その後の波乱万丈の幕開けに相応しかった。

日文研では、世界は広いと思知り、能力・熱意・人格の三拍子揃った多くの研究者たちとの出会いは何ものにも代えがたい人生の宝となった。年齢や知名度に左右されない分け隔てない対応、ご家族の生活や健康問題をも含めて慣れない海外生活での不安と不便を軽減し、ご自身の研究に少しでもプラスになるような滞在生活全般の支援を続けてきたつもりだ。私の海外生活で受けた様々な心遣いやトラブルから学んだ教訓などを、日文研の仕事に活かすかと思っている。

さらに日文研の中で悟ったことのひとつは、（私を含めて）日本人は驚くほど世界を知らない、日本のこともあまり知らない、かなりのどかな一国民であるという実感である。そもそも「日本文化を研究する研究所」という存在が（いまだに）明確に把握しきれず、日本文化研究センター=Center for Japanese Studies と日英語不一致、センターなのか研究所なのか曖昧で、問合せのたびに「日本に関連するすべての事象を研究対象とする機関」と煙に巻くような回答は最後まで続いた。

現在は、広い視野のアジア研究としての日本研究という大きな流れができてはいるが、「日本」研究と「日本文化」研究との違いはいまだに明確にわからず、

今日に至っている。小所帯ゆえ、私の在職期間中の対象分野は人文・社会学、実際には(今議論の渦中の)人文系がほとんどであった。JSPS(日本学術振興会)や国際交流基金のフェローシップ取得者は無条件で受け入れていることから、「国際研究協力を推進する日本研究の一大拠点」という立ち位置を世界のアカデミズムにおいて明確にする必要を感じていた。日本唯一の国立の日本文化専門の研究機関として国際的な連携・協力の下で研究を行い、海外の日本研究を支援するという二大使命の下、急激に台頭するアジア諸国と共に多角的に相互理解を深めなければならない21世紀の現在では、1987年設立当初とは立ち位置や世界観などが異なっているはずだ。

「日本が世界に伍していく、貢献していく」という創設当初の志が実現できているかどうかを振り返ると同時に、30年近い研究と交流の蓄積をグローバルな視野で、現代的諸問題の分析・解決を含むすべての日本研究分野に積極的に貢献する道筋が常に明らかにされていなければ、公費を費やしての研究の意義が問われるのではないだろうか。この面では、海外の研究機関の世界戦略の組み立て手法と、国際的に通じる広報の上手さに学ぶところが大きいだろう。日文研の個性と有用性を世界中に堂々とアナウンスできる広報力が問われるところだ。

## 2. 「日本研究」のこれからは？

2009年の着任当時は欧米の研究者の採用が多かったが、その後急速に韓国・中国・台湾の研究者の割合が増加し、現在まで続いている。外国人研究員枠の国別バランスを慎重に配慮せねばならぬほど優秀な東アジア出身者の割合が増え、英国・ドイツ・フランスの研究者の採用が激減、米国からの採用がゼロの年もある。近年、米国は学術分野への助成が激減し、国を挙げて資金援助をしている中国研究・韓国研究へと日本研究者が「アジア研究者」として流れ、ベテラン層の高齢化と若手研究者層が薄いままという現状を見受けている。あるハーバード大学院生(博士課程)は、「大学院の日本研究専攻者は僕一人で、専門ではない内容の講義まで手伝った(他に誰もいないため)」と語ってくれたが、優秀な若手研究者が日本研究の先進国たる米国で減少傾向であるとすれば、問題だろう。

一方、欧州の日本研究が下火になっているわけではなく、EASJ (European Association for Japanese Studies) などは会員数を増やして活発な活動を続けており、ぜひ日本に長期滞在し、実のある研究を行いたい、と熱望する研究者は少なくない。

全体的に見て、日教研の利用を希望する海外の日本研究者は増えている。日教研初の国からの来訪者は増え、同時に短期滞在から長期滞在傾向が進み、宿泊施設の日教研ハウスの稼働率はかなり上昇している。

京都大学では外部資金獲得の手段を兼ねて、完全にアジアのメンバーとして「アジア研究の世界最高峰となる研究拠点」を目指し、学部と大学院を束ねる大きなユニット単位で多角的な活動を行い、巨額の外部資金を獲得する専門官も雇用している。来年度から全学生に語学認定試験が義務づけられ（無償）、海外留学を推進するなど、語学力向上には相当の知恵とお金を注ぎ、明らかな成果が見えており、巨大な組織としてのトータルな海外情報発信もかなり進みつつある。

日本国内には、「日本文化研究所」と銘打つ私立大学の機関も少なくなく、「アジア研究」という視点からの展開を重要課題として動いている。また、中国、韓国、シンガポールなどはその国際性と資金力を総動員して、アカデミズムにおけるアジアの頂点を狙う勢いで活動を行っている。比べてみて、日本側からのアジア諸国に対する研究は依然として弱いのではないかと思う。

私は日教研の行った国内外の数多くのシンポジウムと研究交流に関わって、中・韓・日・英語を操る研究者に接するにつけて、国際的に通用する言語で、海外の研究者と学術交流を行い、自己の研究を国際的視野から考察できる回路を持つことは非常に有益なことだと観察している。さもなければ、日本抜きのアジア研究の国際化がどんどん進行するのではないか、いや既に日本抜きで欧米の諸大学との多くの共同研究が実施されているようである。

アジアやそこから拓ける世界の視点に立った日本研究を世界に発信する役割は日教研が担うべきであるし、それが可能なだけの情報の蓄積と優秀な研究者が揃っていると信じている。

### 3. 海外研究協力ネットワークの役割は？

数字の上では海外の日本研究者は増加しているが、実際の日文研の研究支援の目玉のひとつである「外国人研究員」の受入れは順調であろうか。

2年先の申請という「外国人研究員」一般公募の性格と認知度の低さ等が原因で、東アジアを除くその他の地域からの応募は伸び悩んでいる。それと対照的に、受入期日や条件に柔軟性のある「外来研究員」への申請は、6年間で倍増（やはり中国籍が3倍近く増加）し、まさに世界中の様々な国から来られている。また、日文研の催しや共同研究会にも積極的に関与される研究者も多い「外来研究員」制度は、より時代の流れに沿ったスピード感と柔軟性のあるシステムである。金銭的支援も重要だが、滞在期間も2週間から1年という幅の広さ、3カ月前位まで申請可能で、宿泊施設まで提供できる、パソコン一つで研究可能なというオープンな日文研の研究協力システムに磨きをかけ、広く世界中で認知され活用されたい。

そのためには、英語での密な情報発信を可能とする広報体制、海外情報の収集とその不断の編集作業、それらをリアルタイムで活用するロジスティックな面での三位一体の協力体制が極めて重要だろう。それには長期的にその業務に従事でき、高い能力を発揮できる有能なスタッフが不可欠なことが自明なのだが、2～3年ごとにスタッフや責任者が入れ替わるようでは、そのシステム作りすらままならないのが実情であった。

情報はパソコンに入ったものだけではなく、現場の人間が持ち、豊穡させていくものだ。それらの見えない情報を含めて日文研の財産として取り込み、情報編集を継続していくのが「海外日本研究データベース」の基本だろう。IT革命は研究のあり方、手法に今後も大きな影響を与え続けるだろうが、システムとしての「情報力」は個人研究レベルではもちろんのこと、組織としての実力に直結するインフラであると思う。

また、海外の研究者を招へいするためには、受入教員が必要となるが、海外ネットワークを個人レベルで築いていることが前提となる制度のため、世代交代が進行しつつある現在、過去に蓄積された人的ネットワークは機能しなくなることが多い。大きな催しを海外で催すだけでなく、ワークショップ、セミナーなどピンポイントで適任者が出向いたり適任者を招へいできる体制にすれば、より活きた人的ネットワークが将来的にも継続・発展していけるだろう。

#### 4. 日文研の将来は？

人間社会は、国境や性別、年代を越えてすべてが繋がっている。豊富な知識と知見を持った優れた研究者が現代の諸問題に積極的に関わり、果敢に情報発信、社会への提言という、生きた学問のあり方として実践することを期待しながら、研究者たちをサポートしてきたつもりだ。

日文研が誇る外書や春画、妖怪資料のコレクションや研究に続き、最近では国内外でサブカルチャー系や映像系研究に関する問い合わせが多くなり、この分野で真剣に研究を深めたい世代がとりわけ海外で育っていると実感する。彼らの興味の深さと熱意に驚くことしばしばで、これは一過性のものではなく、日本文化の顔の一つとして深められていく分野となると期待している。

政府主導のクールジャパンとは異なる位相で、日文研が新たな展開を可能とし、日本文化の研究拠点としてますます発展していく姿を想像するだけで楽しくなる。世界の日本研究の伝統と革新の場、優れた研究者を惹きつけるアカデミックな磁力を持つ「羅漢」「妖怪」「奇人」あるいは「精鋭」のたまり場として、「いつ行っても刺激的でワクワクする Nichibunken」であり続けることを期待している。